

唯物論の立場から、人間の自由意志にもとづく合目的・意識的な価値創造の営為としての労働を十全に保障する条件としての健康のあり方を追求していることは瞭然としている。

その他にも、ナイチンゲールについての著者の独自の解釈や、長興專齋の衛生行政思想、著者の学位論文の主題ともなった後藤新平の衛生行政思想などの日本の保健思想史についても学ぶところの多い章が少なくない。

本書が健康思想と保健活動についての通史的概説として従来の類書を超える詳述と論点の明示を含んでいることだけを取り出しても、研究史にあたる影響とその意味は多大である。しかし、それにも優る本書の意義は、たとえ評価はさまざまであろうとも、一定の分析視角から一つの人間の実践のあゆみを分析して、そこに通底する問題の構造を明確にする研究手法が医学史や医史学においても成り立つことを一つの成果を通して実証したことにあるのではあるまいか。

最後に評者からの要望を述べれば、社会医学における社会衛生学の展開についていく分でも紙幅を割いて欲しかったこと、「技術」「労働」について、いわゆる「技術論争」における「労働手段体系説」と「客観的法則性の意識的適用説（武谷説）」の相違について付言して欲しかったことを記しておきたい。いうまでもなく、評者の要望が本書において満たされていないことが、本書の学術的意義を損うものではない。今後の筆者のさらなる著述を鶴首したい。

(瀧澤 利行)

〔医学書院・東京都文京区本郷五―二四―三、電話〇三―一三八  
一七―五六〇〇、一九九五年、A5判、二三五頁、三二九六円〕

ステュアート・スピッカー著

石渡隆司・酒井明夫・藤原博訳

『医学哲学への招待』

本書は、アメリカの生命倫理学の重鎮であるステュアート・スピッカーの「医学哲学」に関する一二編の論考を収録した論文集である。「医学哲学」という学問分野は、我が国ではまだ一般的なものではなく、またアメリカにおいても著者自身が認めているように誕生して間もなくまだ進行過程にある。著者によれば、「医学哲学」とは自然科学と人文科学、医療現場における実践的な営みと人間性の理論的な営みを橋渡しするものである。医学上の実践すなわち臨床の場における諸問題を哲学的に考察するヘメタ医学として、「医学との共同作業としての医学倫理」とは区別されねばならない。「医学哲学」は、二元論的な形而上学を乗り越え、臨床医学の対象となる生きた身体をその全体において捉え、医学を構成する諸概念（「病氣」・「病理」・「治癒」など）や、医学的実践の前提となる諸概念（「病因」・「臨床的判断」・「脆弱性」など）の分析を通じて新たな医学像を再構築する試みである。

それでは、著者の考える「医学哲学」とは具体的にいかなるものなのであろうか。それは、本書を構成する三部のテーマから伺い知ることができよう。

第一部 老化、安楽死、脳死、人格の死（四編）

—生物学的なヒトから自覚的主体としての人間への眼差しを変えること—

第二部 「生きられる身体」と心身の区別（三編）

—医学哲学的人間学から医学哲学への転換のために—

第三部 医学における認識論的諸問題（五編）

—医学のなかに哲学の役割を確立すること—

第一部では、脳死や安楽死に代表される倫理的問題を洞察するに際して一個の主体として人格概念という視点の必要性を主張し、医療現場における実践的な営みと人間性の理論的な営みとの統合を訴えている。第二部では、新たな身体像としての「生きられる身体」を医学と哲学の接点として捉え、ドイツを中心にして発展した「哲学的人間学」の研究に基づき、様々な自然・社会・人文科学を統合する総合的な医学哲学的人間研究を提唱する。第三部では、フランスのエピステモロジーの伝統を踏まえ、我々が実際に生きている「生活世界」の再構築を通じて、現代の医学および医療を認識論的に論じている。

残念ながら評者は、本書だけでは「医学哲学」の具体的なイメージを明確には捉えることはできなかったが、著者は「医学倫理と科学哲学」の結合を通じて、単なるテクニカルな議論でも、現医療場から乖離した形而上学的思弁でもなく、医学の倫理的問題を考察する際の基盤を提供しようとするような哲学を指摘していると思われる。よりよい理解のためには同じ「医

学哲学叢書」の中に収められている『新しい医療観を求めて』が参考となるであろう。近年巷で氾濫している生命倫理に関する書籍の多くがテクニカルな議論に終始している観があることを鑑みると、我々は著者の「医学哲学」に真摯に耳を傾ける必要があるのではないだろうか。その意味でもこの叢書の続巻が期待される。

（伊藤 和行）

〔時空出版、東京都文京区小石川四―一八一三、電話〇三―三八二一五三一、一九九五年、A5判、三七一頁、三八〇〇円〕